
らりるれろの歌

塵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らりるれろの歌

【コード】

N9959M

【作者名】

塵

【あらすじ】

らりるれろの歌を歌うと不幸になります！

粉碎されて塵。床に散乱している以前領収書だった塵。

後悔が交錯しながらも塵を、一つずつ少しずつ拾い上げていく。腰を屈めては一粒、二粒と。

全て拾い上げた時には陽も曲がっている。赤く燃える、差し込まれる光源。部屋が照射されている。立ち上がった後にため息。二度。三度。四度。ため息。

洗濯かごにも塵が。五度目のため息。領収書だった塵ばかりで力ゴは鬱陶しく姿を転じている。

塵。塵。塵。塵。

洗濯機を持ち上げた。怪力で。軽々と部屋の中で洗濯機が私によつて振り回され、逆さになる。

「あはははは」

笑い声と共に塵が。雪のように塵が床に散乱していく。洗濯機を持ち上げたまま部屋を駆け回る狂人の動き。だがこの場合は、自分が狂人のフリをしているという意識があるから、ストレス発散の行為であるとわかってしている。問題なのは、私の怪力かもしれない。洗濯機を軽々と持ち上げられる人間など、十分に狂人ではないだろうか。ある意味。

部屋のド真ん中に叩き付けるようにして、洗濯機を。とんでもない振動が、洗濯機の重みと私の怪力とで相まって、おそらくアパート中に鳴り響いてしまっただろう。苦情がくるかもしれない。誰かが、舌打ちをしているかもしれない。

洗濯機によじ登って、体をカゴの中にうずめた。薄暗い洗濯機の中。蓋を閉じてみようかなと思って次の瞬間には閉めた。暗闇。真つ暗。

「……しずかだ……」

六度目のため息。洗濯機の内部にある優しさは暗闇。陽が差し込

まれてこない安らぎだ。

睡魔に襲われて、そのまま眠りに落ちた。

「おい、入れてくれよー」

声。人の声。少しくぐもったような遠くからの声。玄関からだろうか。それとも別の部屋から響いてきたのだろうか。おかげで目を覚ましてしまったじゃないか。

洗濯機の蓋を久しぶりに開く。体を部屋の床に着地させる。もう陽が落ちてる。部屋も、洗濯機の中ほどではないけれども、暗い。洗濯機の暗闇に慣れると、普段よりも夜が明るく感じれるのは面白いこと。

「おい」

また声。玄関からだった。なんだ知り合いか。と思って玄関の戸を開けると、顔がヌツと出てくる。

「よ」

挨拶をしてくる。私も挨拶を返す。

「よっ」

こうして部屋は二人になった。

「電気つけるよ」

「おっけー」

「洗濯機があんなところに」

「まあね」

「ほめてない」

「まあね」

洗濯機が部屋のご真ん中に。他人に見られるのは少しばかり、面白い。どんな反応を示してくれるのだろうか、ってな。困るだけだろうけど。申し訳ないと思う。

「洗濯機の修理を」

妙な理由を口から零す。相手は苦笑する。

「修理って」

そう言いながらも相手も洗濯機に手を伸ばしているりと調べている様子を始めた。

「なにしてんの？」問うと。

「洗濯機が最近マイブームで」

という胡散臭い答えが。きっと何かを探しているのだ。面白いことか。

「うぐぐ」

「ん」

そんな時に、

「おい、入れてくれよー」

と声。また声。こうして部屋は三人になったのだ。

三つの人影で、手を繋ぎ合いぐるぐると時計回りに。明かりはもう失われている部屋の中で、薄い月の儂い明かりだけが目の頼りだ。六つの瞳が交錯しながら闇を巡る。踊り狂う三人は洗濯機を囲い込み、ぐるぐると時計回りだ。

「れれ」

「るる」

「らららら」

歌をみんなで歌う。らりるれるの歌。昔誰かに教わった懐かしい歌。もう戻れない子供。

いまは大人。

「らららららら」

ぐるぐると回る回転を続ける。三人の誰かが倒れてしまうまで回転は止まらない。

洗濯機が稼動した。三人の力だ。洗濯機が音をたてて領収書の塵を。塵。塵。塵。

三人でらりるれるの歌を。
いつまでもいつまでも。部屋の薄暗い闇の中で。
夜を巡りながら。

ピンポーン。

そんなときにチャイムが鳴った。三人で目をあわせる。歌をとめた。回転も止めた。洗濯機も止まった。

ピンポーン。

静寂に鳴るチャイムの音。

「ちやいむ」

「なんでチャイム」

「誰だろう」

顔を見合わせる。三人。六つの瞳が交錯するけれど、答えは出な

い。
知らない人だ。

ピンポーン。

「誰がいく？」

「三人でいこうよ」

「怖い」

縮こまり合って、怖がる。静まり返っている夜の部屋。暗闇。チヤムだけが耳に残る。

三人でドアの方へと顔を向ける。ピンポーン、と再び鳴る。

洗濯機を誰かが見た。すると他の誰かも洗濯機を見た。最後の一人も見た。

「おれだ」「わたしだ」「ぼくだ」

蓋が開かれる。中に入ろうと三人でもがきあう。

入れるのは一人だけ。

でも、誰かが洗濯機を覗き込んだときに。息を呑んだ。

「あつ……」

洗濯機の中には影があった。それは蠢いていて、たしかにそこにいる。

洗濯機の中には先客がいた。

ピンポーン。

「ひ」「い」「あ」

やがてその部屋には三つのお人形が転がるようになったという。
みんな首が無いのだそうだ。

首が無いからお歌は歌えない。

らりるれるの歌を歌う時には気をつけなければならない。首の無いお人形にされたくないのならば。

洗濯機で首は洗われている。ゴトゴトと音をたてて。六つの瞳は交錯しながら、洗濯機の蓋の中で毎日らりるれるの歌を歌っているのだそうだ。もちろん、音は反響する。夢限に。洗濯機の中で永遠に歌だけを聴き続ける。歌い続ける。

それが塵になってしまったときに、お人形は首を搜索するのだそうだ。

いつも勘違いしてしまって、無差別に首を狩ってしまう。だから塵は増える。

次はあなたの番である。

首を取られる。

(後書き)

怖くなかったらごめんなさい。怖かったらごめんなさい。つうかも
う、ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9959m/>

らりるれろの歌

2011年11月13日18時11分発行